

〈論説〉

一茶と良寛 ——「焚くほどは……」の句を通して——

後藤 泰一*

はじめに——本稿の目的

以前、民法の視点から「諏訪の末子相続と北信濃の均分相続－河合曾良と小林一茶の場合－」¹の考察をした折、「焚くほどは風がくれたるおち葉哉」という一茶の句に遭遇し息を呑んだ。良寛の「焚くほどは風がもて来る落ち葉かな」（五合庵の有名な句碑）²を想起したからである。何故こうも似ているのか？（どちらかが真似た？）暫くこの疑問が頭から離れなかった。少しずつ調べていくと、同じ疑問は以前からあり未だに明らかでないらしいことが分かった。ならば私も（門外漢ながら上記論考の最後のひと押しのつもりで）二つの「焚くほどは」の背景を追究してみようと思ったのが本稿の動機である。

もともと、一茶の句が『七番日記』（文化12年（1815年）10月）に載っているのは分かったが³、良寛の句となると、上記句碑に刻まれていること（及び文政2年（1819年）長岡藩主牧野忠精にこの句を差し出したという逸話があること）以外何も分からない。せめて一茶が「焚くほどは……」と詠んだ経緯ぐらいは知りたい。様々考えた末、『七番日記』を凝視し、その句が《いつ》《どこで》詠まれたのか探ることとした。さらに、比較の意味において、良寛（趣味として学んだ“私の良寛”というほかないが）にも少々触れてみよう。二つの句を巡り何か分かってくるかも知れない。これが本稿の目的である。

＜一茶（小林弥太郎）：宝暦13年（1763年）－文政10年（1827年）・信濃国柏原小林家に出生・65歳没）／良寛（山本栄蔵）：宝暦8年（1758年）－天保2年（1831年）・越後国出雲崎名主橋屋山本家に出生、22歳の時に国仙和尚に随行し玉島円通寺へ（弟由之が跡継）、35歳で帰郷（異説あり）・74歳没）。＞

一 一茶『七番日記』

1. 遺産相続争いを終えて 一茶は、15歳の時（安永6年・1777年）江戸へ奉公に出て、50歳の時（文化9年（1812年）11月）柏原永住を決めて帰郷したが（江戸後期の柏原は幕府領）、その間、父弥五兵衛が「二ツ分」という遺言（注4参照）をして死去（享和元年（1801年）・69歳）。ここから一茶と異母弟専六

* 信州大学名誉教授。現在、放送大学客員教授（長野学習センター）、信州大学大学院総合人文社会科学研究所（法学分野）特任教授。専門は民法。

1 後藤泰一・宗村和広「諏訪の末子相続と北信濃の均分相続－河合曾良と小林一茶の場合－」『信州大学法学論集』第27号（2016年）115頁参照（以下、副題省略）。

2 新潟県燕市国上上寺五合庵（国上山中腹にあり47～48歳頃から約20年住む）脇の良寛句碑案内板に「堂久保登盤 閑勢閑毛天久留 於知者可難 良寛書 この句碑は良寛全集の著者玉木礼吉氏が全集刊行を記念して玉木氏所蔵のものを展大して建碑」とある（今の庵は大正3年（1914年）再建）。

3 一茶「七番日記」文化12年10月：丸山一彦校注『一茶七番日記（下）』（2003年・岩波文庫）175頁（以下、丸山『七番日記（下）』と略称）、小林一茶／玉城司訳注『一茶句集』（2013年・角川ソフィア文庫）516頁参照（以下、玉城『一茶句集』と略称）。

(仙六とも)の間に遺産を巡る争いが生じた。一茶の出郷後、実家を支えた専六としては「二ツ分」に納得できなかったのである(専六の努力は、現行民法の寄与分(民法904条の2)に係る問題である)。文化5年(1808年)、専六もついに折れ、「取極一札之事」(今日の「遺産分割協議書」となるか)が取り交わされた(一茶は相続分3.4石を所得し柏原の戸主・本百姓となる)。その後、一茶は、自己の相続分(田畑・家屋敷)を専六が享和元年以降使用収益していると主張し、文化4年までの7年分の得米代金(小作料)・家賃分30両を専六に請求(遺産分割までの占有・収益を巡る一茶の主張は現行民法下でも生ずる難問の一つである)。これが拒否されたため「江戸の評定所に訴えよう」⁴としたところ、菩提寺の明専寺住職が間に入り、文化10年1月、「熟談書付之事」が交わされて全面解決に至った(専六が一茶に11両2分を支払い家屋敷等を引き渡す旨約され、翌年、一茶は生家の半分「南側の間口4間3尺2寸」を取得⁵。遺言の「二ツ分」につき、「一茶が故郷を離れて暮らすに至った特殊な事情及び専六が父の許で一緒に働いてきた事情等々を熟慮した上で父の最終意思に基づく処分」であり、財産(家産)や家族に精通する父親であればこそなされる冷静な判断・配分」ではなかったかと私は考えている⁶)。

2年後の文化12年(1815年)9月、一茶は、『一韓人』『あとまつり』出版のため江戸へ行き、「下総・上総を廻り、12月21日江戸を発って、28日帰郷」⁷した。「焚くほどは……」の句は『七番日記』文化12年10月の所にある(一茶53歳)。

2. 『七番日記』文化12年10月1日～30日 まず初めに、『七番日記』文化12年10月1日～30日(西暦1815年11月1日～30日)の日付・天気・出来事が書かれた部分(上段)を抜き出そう⁸。その前に4点ほどご了解願いたい。(i)日付の斜線(/)以下の□や【】内の文章は後藤(筆者)による。(ii)□の表示、例えば、2日の[長1]は、10月の長久山(本行寺)での1泊目を表す。翌3日に「入」がないのは長久山に連泊したからであり、その場合は[長2]と表示する。(iii)宿泊先の表示につき、松井(⇄松)と表示は日本橋久松町松井家、大川(⇄大)はマバシ(馬橋)の大川斗圍(とゆう)宅(馬橋は水戸街道(千住―新宿―松戸―(馬橋)―小金―我孫子―取手……水戸)の松戸宿と小金宿の間の宿)、長久山(⇄長)は日暮里の長久山本行寺(住職の20世日桓上人(俳号一瓢)は多くの俳人と交遊があり、一茶は本行寺や松井家を定宿にしている)。高谷(⇄高)は市川市高谷、布川(⇄布)は現在の茨城県北相馬郡利根町布川。(iv)『七番日記』の「上段に年月日・晴雨・行動・見聞した事実等を記載し、下段にその月々の作句(発句・俳諧歌)を録し、また時には先人・知人の歌句を交えている。……文化8年以降はほぼ二段分載形式に整備されている」⁹旨を付け加えておく。

1晴 松井ニ入 148文タバコ 今日菴ニアヅケル / [松1]【松井は、「江戸日本橋久松町の商人。

⁴ 丸山一彦校注『七番日記(上)』(2005年・岩波文庫-以下、丸山『七番日記(上)』と略称)333頁の注②のほか、後藤・宗村・前掲「諏訪の末子相続と北信濃の均分相続」133頁以下(とくに141頁・160頁・168頁以下)参照。一茶「父の終焉日記」の4月29日に「父は、病の重り給ふにつけて、孤の我身の行末を案じ給ひてんや。いさゝか〔の〕所領、はらからと二ツ分にして與んとて、くるしき息の下より 指図なし給ふに、『先中島でふ田と、河原でふ所の田を弟に附属せん』とありけるに、仙六、心に染ざりけん。父の仰せにそぶく。其日父と仙六いさかいて、事止ぬ」(丸山一彦・小林計一郎校注『一茶全集 第5巻』所収(1978年・信濃毎日新聞社)72頁)とある。

⁵ 矢羽勝幸『小林一茶』(2004年・勉誠出版)131頁。

⁶ 後藤・宗村・前掲「諏訪の末子相続と北信濃の均分相続」154頁。

⁷ 玉城・前掲『一茶句集』581頁(略年譜)参照。

⁸ 丸山・前掲『七番日記(下)』172頁～178頁より。

⁹ 丸山・前掲『七番日記(下)』471頁。

今日庵元夢門。一茶の親友。其翠楼と号した。』¹⁰ 今日菴（庵）は、「俳友一峨の庵号。』¹¹（今日庵 4日を参照）。】

- 2晴 寅刻未夜明久松町ニテ糞満々タル後架二片足踏落シヌ 臭気汚シテ 四方闇所ノ始末絶言語ト云々 成美序文校正 已上刻東叡山法王（主）御練扒（拜）見 已下刻入長久山大民相見 / **長1** 【午前3～5時「ねぼけて便所に片足を落とす」¹²。9月に『あとまつり』出版のため江戸へ（6日及び本稿注22下線部参照）。午前9～10時頃東叡山（上野寛永寺）、10～11時頃長久山本行寺に入る。大民は「江戸の俳人」¹³。一茶は、日本橋久松町松井家と本行寺（JR東日本日暮里駅西口正面にある）を頻繁に往来している（「谷中本行寺」とも言っている¹⁴）。久松町から本行寺まで上野寛永寺・不忍池経由で約5.5km・徒歩1時間10分前後¹⁵。】
- 3陰 訪三阿 千駄木大（太）田公館中訪田口勘介 / **長2** 【千駄木（文京区千駄木¹⁶）に掛川藩主太田資愛（8日を参照）の下屋敷があった（本行寺から1.4km弱、17分前後。三阿や田口勘介との関係は不明）。】
- 4晴 鶴老ノ旅宿東叡山中観成院ヲ訪不逢 松井ニ入 於三好笠盗マル、一峨訪 / **松2** 【鶴老（かくおう）は守屋（茨城県守谷市）の西林寺住職、飯田出身で一茶の親友¹⁷。昔、上野寛永寺に36の子院（宿坊:現在19）があり、鶴老旅宿の観成院はその一つ（1709年（宝永6年）に浄光院御霊屋別当として創建されたが廃寺）。江戸の地図¹⁸を見ると勸成院（観成院）が載っている（本行寺から約800m南で長昌山大雄寺（台東区谷中6丁目）の正面。観成院と本行寺の間に後述の笠森稲荷が載っている）。三好（みよし）は江東区深川三好。久松町からは新大橋（深川大橋）経由で約3.5km・45分前後（一茶が以前住んだ本所五ツ目大島「愛宕山勝智院」¹⁹まで約5.3km・1時間10分弱²⁰）。一峨は江戸の俳人（「今日庵元夢の門人で一茶の友人。根本氏。……のち一茶の助力を得て今日庵の再興をはかり、葛飾派から非難された」²¹という）²²。】
- 5晴 / **松3**

¹⁰ 丸山・前掲『七番日記（上）』25頁の注①。

¹¹ 丸山・前掲『七番日記（下）』173頁の注①。

¹² 矢羽・前掲『小林一茶』236頁（年譜）。「松井家での出来事」（丸山・前掲『七番日記（下）』173頁の注③）。

¹³ 丸山・前掲『七番日記（下）』173頁の注⑧。

¹⁴ 例えば、文化11年（1814年）8月9日、同12年9月8日、文化13年10月1日（文化8年3月13日に「日暮里」の記述がある）。荒川区役所によれば、本行寺は「太田道灌の孫の太田資高が大永6年（1526）に江戸城内平河口に建立し、江戸時代に神田、谷中を経て、宝永6年（1709）に現在の地に移転」したという（荒川区公式サイトで本行寺を検索。下線は後藤）。

¹⁵ 距離・徒歩時間等については、Googleマップを利用した。

¹⁶ 丸山・前掲『七番日記（下）』173頁の注⑩。

¹⁷ 丸山・前掲『七番日記（上）』85頁の注⑤。

¹⁸ 江戸の地図は、インターネットで“古地図 with MapFan”を利用した（江戸と東京の街並みが比較できる）。

¹⁹ 玉城・前掲『一茶句集』578頁（略年譜）参照（現在の江東区大島）。

²⁰ 勝智院は昭和41年に佐倉市上座へ移転。勝智院の住職（法名：榮順法印）は「俳諧をよくし一茶と同じ葛飾派の加藤野逸に師事し、白布と号した……一茶が勝智院に住むことができたのも同じ派に属した白布の恩情によるもの……文化元年（1804）4月9日白布が他界したために立ち退かざるを得なくなり同年10月移転」したという（矢羽・前掲『小林一茶』85頁）。

²¹ 丸山・前掲『七番日記（上）』111頁の注⑥、大磯義雄『蕪村・一茶その周辺』（1998年・八木書店）267頁参照。

²² 前田利治「一茶と周辺の人たち」（『国文学研究』49巻1973年・早稲田大学国文学会）の「今日庵一峨—一茶破門事件—」に、一茶が柏原に帰住した文化9年秋出版の『なにぶくろ』（内題『俳諧何布久魯』半紙本一冊）は「葛飾派の今日庵元夢歿後十三回忌にあたるこの年に、門人一峨が『しきりにむかし恋しがりつゝ、ふるくありける元夢仏の木像を安置せむ』（一茶序）として、旧庵跡の橘町に今日庵を再興した時の記念集で……親交のあった一茶と成美の序を巻頭に置いたとある（同書74頁。下線は後藤）。

- 6 晴 於元岩井荒木安兵エ方買表紙130枚(枚)代金1分ト250文 入長久山 / 長3 【元岩井は神田元岩井町(現岩本町二丁目付近)。表紙は『あとまつり』等のもの(『あとまつり』の魚淵跋文(一茶代筆か)を執筆。) ²³ 文化13年10月に『あとまつり』『杖の竹』出版のため江戸に出る。本行寺(住職一瓢)で髪をそる ²⁴ とされる。】
- 7 寅一刻ヨリ雨 一考 反古 柯尺 魚淵ニ入 文路届田中一卷管入等一封ニシテ允兆ニ出ス赤汐宗介 夜酉刻雨甚シク亥刻ヨリ晴 長久山両吟始 / 長4 【午前3～4時より雨、17～19時雨甚だしく、21～23時より晴(一考ほか下記<★>参照)。】
- 8 大晴 太田公御入 / 長5 【太田公は、「掛川藩主太田資愛。道灌の末裔か。」 ²⁵】
- 9 晴 夜子刻根岸肥前守役所出火 午刻上野寓居観成院訪鶴老聖人而扒(拝)浄光院及坊太郎墓 日晡久松町 宿松井 / 松4 【夜中23時～1時頃、根岸肥前守役所出火とあるが、根岸肥前守鎮衛(元文2年(1737年) - 文化12年11月4日)は寛政10年(1798年)から文化12年まで南町奉行を勤めた。正午に観成院(上述)の鶴老を訪ねている。坊太郎の墓というのは、「父の仇を討った孝子田宮坊太郎の碑」 ²⁶。夕方、久松町へ(宿松井)。】
- 10 晴 訪成美 / 松5 【成美は夏目成美(「藏前の札差井筒屋の主人で名を包嘉、通称を八郎右衛門……悠々遊俳の境遇に自適……貧寒の俳人一茶の人となりを愛し、俳壇的にも厚く庇護し」 ²⁷ だ)。
- 11 晴 / 松6
- 12 晴 遊翁塚 訪有佐 / 松7 【翁塚は「江戸深川長慶寺の芭蕉塚」、有佐は「二世有佐で江戸の俳人。」 ²⁸】
- 13 陰 入長久山 / 長6
- 14 陰 小雨 / 長7
- 15 晴 松井ニ入 / 松8
- 16 晴 流山ニ入 柏原出書 虱薬100文入 / 長8? 【秋元三左衛門(俳号双樹☞後述)のいる流山は「小林一茶寄寓の地」 ²⁹ とされる(虱薬は“幸手屋の虱うせ薬”か☞23日を参照)。】
- 17 晴 マバシニ入 / 天1 【水戸街道の馬橋に大川斗圍がいる。】
- 18 雨 舟バシ海人村ノ女客来 / 天2
- 19 陰 / 天3
- 20 大晴 松戸太庄訪 石浜社ヨリ真先(崎)太神宮 松井ニ入 / 松9 【石浜社は「浅草橋場に

²³ 矢羽・前掲『小林一茶』年譜236頁。

²⁴ 矢羽・前掲『小林一茶』年譜238頁。一瓢に関し小林計一郎『一茶 - その生涯と文学』(2003年・信濃毎日出版社)115頁照。

²⁵ 丸山・前掲『七番日記(下)』175頁の注⑤。本行寺境内に一茶句碑「陽炎や道灌どのの物見塚」(『七番日記』文化8年正月の句)がある。

²⁶ 丸山・前掲『七番日記(下)』175頁の注⑦。別名田宮小太郎(坊太郎といわれた)、江戸時代の剣客で歌舞伎や人形浄瑠璃や講談で広まった仇討物語の主人公。田宮坊太郎墓は、観成院境内にあったが明治36年に青龍院(当時の寛永寺寺院)に移転(『下谷區史』(昭和10年(1935年)・東京市下谷區役所)1258頁)、現在、寒松院に「正保二酉歳三月二十一日 空仁大徳 俗名 田宮坊太郎」という墓碑がある。

²⁷ 矢羽・前掲『小林一茶』90頁以下参照。

²⁸ 丸山・前掲『七番日記(下)』175頁の注⑨及び⑩。

²⁹ 流山市公式サイトにて「小林一茶寄寓の地」を参照。

ある石浜神宮。真崎神宮も橋場にあった。」³⁰】

21晴 / 松10

22晴 訪太筈不逢 / 松11 【太筈(たいこう)は、下総(千葉県)「香取郡小南の人。青野慶次郎。椿丘と号す。……のち江戸と長岡に居を構え、柏原の一茶宅を訪問したことも」ある³¹。文政4年「俳諧士角力番組」(東(諸国)と西(江戸)を分ける「柱」に一茶が「差添」として名を連ねる)西方五段階の一番上に「江戸タキウ太筈」とある³²。】

23雨 守静両吟始 / 松12 【守静(俳号)は、幸手屋(さってや)茂兵衛で一茶の「俳友」³³(江戸では小伝馬町三丁目「幸手屋の風うせ葉」や芝金杉通り三丁目「鍋屋(源兵衛)の風紐」が知られた。『七番日記』文化13年2月3日に「幸手屋ニ入」、その下段に「手伝って虱を拾へ雀の子」がある³⁴)。】

24陰 終日 新井ヨリ高谷ニ入 / 高1 【新井は市川市新井³⁵。高谷(市川市高谷)の安養寺は一茶と親交のある太乙庵素英が晩年に住職として住んだ寺³⁶。】

25雨 / 高2

26晴 夜小雨 布川ニ入 逢近嶺 中山正中山法花(華)経寺訪 山門建立 文化9年4月当山91世僧正法印 日顛 大鐘 文化11年 大願主 中村歌右エ門 92世 日慎 / 布1 【近嶺は沢近嶺(さわちかね)で取手の俳人・国学者・歌人、日蓮宗大本山正中山法華経寺は市川市中山にあり、中村歌右エ門は化政期の代表的名優³⁷。一茶は、下総布川(茨城県利根町)の回船問屋古田和左衛門(月船)宅に何度も泊まっている³⁸。】

27雨 / 布2

28陰 又晴 近嶺皈 / 布3 【近嶺かえる】

29雨 / 布4

晴18 陰4 雨7 / 【陰4は陰5の誤記か。「28陰 又晴」が晴なら「晴18」、「30陰 夜雨」が雨なら「雨7」、18日+5日+7日=30日となる。】

松井12 大川3 長久山8 高谷2 布川5 / 【12日+3日+8日+2日+5日=30日】

30陰 夜雨 / 布5

<★一考は「善光寺町の俳人、一茶門か。」³⁹ 『七番日記』文化10年6月18日に「桂好亭ニ入……去十五日巖光シ今日耐」(桂好亭☞下記)、同月22日「山中赤田薬呑 夜大熱」、同月26日「一考ヨリ上菓子」、同月28日「一考ヨリ

³⁰ 丸山・前掲『七番日記(下)』177頁の注③。

³¹ 丸山・前掲『七番日記(上)』121頁の注③。江戸と長岡に半年ずつ滞在し「半年庵とも号した」(一茶「俳諧抄録」(小林計一郎・丸山一彦校注『一茶全集(第7巻雑録)』(1977年・信濃毎日新聞社)426頁の注135)。

³² 矢羽勝幸編『一茶の総合研究』(1982年・信濃毎日新聞社)口絵「俳諧士角力番組 文政四辛巳年 改正 黒白山人著」を参照。

³³ 丸山・前掲『七番日記(上)』127頁の注⑤。

³⁴ 文中の風の句は、丸山・前掲『七番日記(下)』204頁参照。

³⁵ 丸山・前掲『七番日記(下)』176頁の注④。

³⁶ 船橋市の山野山正延寺公式HPに「延命院第32世の宥杲(ゆうごう)和尚は、俳句をたしなみ小林一茶とも親交が深かったといわれ……太乙庵素英とは、宥杲和尚の俳人としての名前(俳号)……宥杲和尚は、嘉永2年(1849)に高谷村(市川市高谷)の安養寺にて、その生涯に幕を下ろし」たとある。

³⁷ 丸山・前掲『七番日記(下)』177頁の注⑧⑩⑪参照。

³⁸ 小林・前掲『一茶—その生涯と文学』116頁参照。

³⁹ 丸山・前掲『七番日記(上)』385頁の注⑨。

ソバ来ル」、7月7日「糶大農出」(☞文路を参照)、同月10日「一考ヨリソバ来」とある⁴⁰。／反古は小林反古(はんこ)、善光寺新町の富商美濃屋久七。夏日成美に認められ一茶をよくもてなした⁴¹。／柯尺は滝沢柯尺(かせき)、「大門町に住み、善光寺の寺侍として行政手腕を発揮するかたわら、松屋という屋号で酒屋」を営んだ。一茶は善光寺を訪れる度にここへ顔を出し宿泊した⁴²。兄は毛野(上水内郡飯綱町赤塩に毛野城跡・毛野館跡がある)の豪農滝沢可候(かこう:文化4年苗字帯刀を許される⁴³)。弟は高山村紫の久保田家養子に入った久保田春耕で三人とも一茶の門人で有力な支援者。／魚淵(なぶち)は佐藤魚淵(☞6日)、長沼(長野市)の医者で俳諧・和蘭学のほか佐久間象山から漢学を学ぶ⁴⁴。／文路は上原文路、一茶の門人で旧北国街道沿新町(善光寺仁王門付近)の葉種屋。文路の家は「一茶が善光寺界限を訪れる際の定宿……一茶が江戸等に手紙を出す際に取り次ぎ」⁴⁵をしていた。一茶は「文化10年8月から悪性のデキモノのため、この家で75日も病臥し……一茶を厚遇した。」⁴⁶ 三好屋は文路の屋号、桂好亭は文路宅。／允兆は長沼の門人、文化13年1月「公常」と改号⁴⁷。文化13年8月7日「三好屋番頭来 允兆より金百疋来」⁴⁸とある⁴⁹。／田中は老舗旅館「湯田中湯本」主人湯本希杖⁵⁰で一茶の門人。湯本希杖・其秋父子が江戸から帰った一茶をもてなした⁵¹。／赤汐宗介は赤塩の飛脚⁵²、隣の毛野に滝沢可候がいる。上記10月7日「……一封ニシテ允兆ニ出ス赤汐宗介」とある⁵³(允兆宛書状を赤汐宗介に頼んだのだろう)。『七番日記』に「小玉」や「小玉団七」が出てくるが、団七は小玉村(飯綱町)の飛脚⁵⁴。>

40 丸山・前掲『七番日記(上)』384頁～385頁・388頁・400頁(7月2日「仙六来 ソバ一袋」とある)。

41 小林・前掲『一茶-その生涯と文学』117頁参照。

42 一茶記念館(長野県上水内郡信濃町柏原)HPにて「一茶と善光寺⑦「滝沢柯尺宅跡」を検索。

43 小林・前掲『一茶-その生涯と文学』119頁・128頁参照。

44 小林・前掲『一茶-その生涯と文学』120頁参照。

45 一茶記念館HPで「一茶と善光寺⑨「上原文路宅跡」を検索。

46 小林・前掲『一茶-その生涯と文学』126頁参照。『七番日記』8月の最後に「九十九日臥桂好[亭]」とあるが、『志多良』によると『七十五日』が正しい」という(丸山・前掲『七番日記(上)』401頁の注③)。

47 丸山・前掲『七番日記(上)』307頁(文化9年10月)の注③、同395頁(文化10年8月2日)の注④ほか。丸山・前掲『七番日記(下)』249頁(文化13年7月9日)の注①参照。

48 丸山・前掲『七番日記(下)』252頁。

49 銭十文を一疋(ひき)といい贈答用の金一分を金百疋とした(金1分は4分の1両)。貨幣博物館によれば、「……米価から計算した金1両の価値は、江戸初期で約10万円前後、中～後期で4～6万円」ほどとされる(貨幣博物館HPにて「お金の歴史」を検索)。金百疋は1万円～1万5千円位か。

50 丸山・前掲『七番日記(下)』145頁の注④参照。

51 湯田中湯本(湯田中温泉:長野県下高井郡山ノ内町平穏)公式HPより。

52 一茶は、「豊島久蔵宛書簡」(文政3年11月11日付)にて、赤塩宗助(『七番日記』では宗介)につき「御用なれば日限屹と届候」、古間円蔵につき「地飛脚なれば日限相違あらんかし今迄はなく候」と書いている(御用飛脚赤塩宗助が一茶の書状を扱っている様子が窺える)。なお、この「豊島久蔵宛書簡」(コピー)の入手は長野県信濃町「一茶記念館」(渡辺洋学芸員)のご厚意によるが、もとは一茶記念館開催第70回俳文学会全国大会(平成30年:「一茶書簡の検討-久蔵宛五通-」大阪城南女子短期大学小林孔教授)での配布資料とのこと。以上を記しておく。

53 一茶『急通紀』(小林・丸山・前掲『一茶全集(第7巻 雑録)』250頁以下)に赤塩惣七が出てくる。文化6年4月24日「一書一通 成美 赤塩惣七に遣ス」とあり、この注に「赤塩は上水内郡三水村のうち。惣七は飛脚屋で、奥信濃と江戸を往復していた。一茶はこの年4月5日江戸をたち、帰郷していた」とある(同書261頁、289頁注78)。小林・前掲『一茶-その生涯と文学』225頁の「一茶時代の郵便事情」も参照。

54 丸山・前掲『七番日記(下)』の209頁の注⑤は、文化13年2月9日「小玉人来 一瓢 守静 至長 東陽 杉長 風至 白老 右七通一封ニシテ守静ヨリ来ル」の小玉人とは「牟礼村小玉の飛脚団七であろう」とし、同書331頁の注⑥は、文化14年7月8日「小玉村団七 東都ヨリ荷物来 賃金二朱ト二百八十一文」の小玉村は「上水内郡牟礼村小玉。団七は飛脚」とする。「牟礼宿と古間宿の間にある小玉坂は、約2kmの急坂が続く山道の難所……江戸時代には旅人が休む茶屋が置かれ」という(飯綱町観光協会HPにて「古道・史跡を歩こう-北国街道と牟礼宿をたどる旅-」を検索)。

二 一茶「焚くほどは……」の背景:3つの謎に迫る

1. 第1の謎:長久山(本行寺)8泊目の不思議 (1) 一茶は長久山8と記すが、8泊目(16日の長8?)が明確でない(松井12泊・大川3泊・高谷2泊・布川5泊の計22日分は明確である)。15日に本行寺から松井家へ移動し(松井8泊目)、16日に松井家から流山(下記参照)へ、17日に馬橋へ行っているが、16日夜はどこに泊まったのか。

(2) 流山から本行寺(日暮里)に入り泊ったとすると計8泊、「長久山8」と合致する。この場合は、16日:松井家⇄流山⇄本行寺(泊)、17日:本行寺⇄馬橋となるが(行程①とする)、ここが不思議なのである。初めから流山・馬橋方面へ行くつもりなら、16日は本行寺へ戻らず流山の秋元宅に泊まり、翌17日に流山から馬橋へ向かうのが普通だろう(下記<>内下線部参照)。この場合は、16日:松井家⇄流山(泊)、17日:流山⇄馬橋となる(行程②とする)。

《一茶双樹記念館(流山市)によると、「北総地方には……“葛飾派”の俳人が多く、馬橋で油屋を営む俳人大川立砂(大川斗面の父)もその一人で、一茶もはじめは葛飾派に属し……流山の秋元三左衛門(俳号:双樹)と知りあったのも、おそらく立砂を通じてではなかったかと思われます。北総地方は、一茶にとってはいわば第二のふるさとであり、流山の双樹のもとには、50回以上も来訪したことが知られています。……〈双樹は〉流山で醸造業を営み、味醂の開発者のひとり……秋元家5代目三左衛門(1757-1812)……家業の傍ら俳句をたしなみ、俳号を双樹」⁵⁵と号したという(下線及びく)は後藤。注55下線部も参照。》

行程①を地図で確認すると⁵⁶、松井家(久松小学校付近とする)ー流山(流山市一茶双樹記念館とする)約23km・5時間前後、流山ー本行寺が約20km・4時間15分前後、計43km余(いずれも水戸街道経由)、9時間半～10時間は歩くことになる。さらに、翌17日、本行寺ー馬橋(常磐線馬橋駅付近とする)約20km(水戸街道経由)が控える——53歳の一茶にとってきつくないか。

それに比べて、行程②は、流山ー馬橋が約6km、1時間十数分足らず、断然こちらの方が楽である。これだと長久山8泊が7泊に減り新たに「流山1(泊)」が加わる(『七番日記』には、文化9年5月「流〔山〕3」、文化12年12月「流山1」、文化13年11月「流山2」、文化14年2月「流山1」が多々見られる)。しかし、文化12年10月に流山泊を示唆する記述はない。16日は日暮里(長久山)に戻り本行寺に泊まったと解する他なく(16日に「柏原出書 虱薬100文入」とあるので、行きか帰りの途中、日本橋高田飛脚⁵⁷に柏原への運送を頼み、小伝馬町の「幸手屋」で虱薬を買ったのであろう)、「長久山8」は覆らない(17日に流山行きを決めたか)。小林計一郎氏によれば、一茶は、江戸ー善光寺(約41里)を5泊6日で歩き(1日平均10里以上)「58歳で中風にかかるまでは、人並み以上、健脚だったことは間違いない」⁵⁸とのこと。53歳なら行程①も難なく歩いたのだろう。

2. 第2の謎:どこで詠んだのか(場所) それでは、どこで「焚くほどは……」と詠んだのか(便宜上この謎を先行させる)。この句の前に「かさ守りのおせん出て見よ玉霰」「手の皴〔の〕おち葉かく

⁵⁵ 一茶双樹記念館HPを検索。小林・前掲『一茶ーその生涯と文学』116頁には、「一茶が下総方面へ行く時は必ずこの人の家に泊まり、また双樹が江戸へ出た時は必ず一茶をたずね、その交際の深いことは、ひととおりではなかった」とある(下線は後藤)。

⁵⁶ インターネット上のGoogleマップを利用した。

⁵⁷ 一茶・前掲『急通紀』の寛政10年に「一状一通 中村与右衛門殿へ 賃三十式文 日本橋ひもの町高田飛脚に出ス 十月三日十一日出他」とあり、寛政11年2月18日に「すりもの入 信州柏原に 新スキヤ丁高田飛脚に出 賃四十八文也」とある(同書251頁～252頁)。さらに、小林・前掲『一茶ーその生涯と文学』225頁～226頁参照。

⁵⁸ 小林・前掲『一茶ーその生涯と文学』81頁。

には相応ぞ」「やよ烏赤いおち〔葉〕を踏むまいぞ」、後に「風のおち葉ちよいちよい猫〔が〕押さへけり」「うつ（宇津）の山尻呑んで向ひけり」「土円（団）子けうも木がらしこがらしぞ」「猫の子がちよいと押へるおち葉哉」と“笠森稲荷”（下記）関連の8つの句が並ぶ。

（1）かさ守りのおせんとは、笠森お仙である⁵⁹（宝暦元年（1751年）－文政10年（1827年）：一茶より一回り年上で文政10年1月29日没（墓は中野区の正見寺にある。なお、同年11月19日一茶没）。笠森稲荷前の水茶屋「鍵屋」の看板娘であり、鈴木春信が浮世絵に描いたことで（谷中大圓寺に「笠森おせん」の碑」「鈴木春信の碑」がある）、お仙目当ての参拝客が笠森稲荷に押し寄せ、鍵屋は大繁盛したという（現在の功德林寺（台東区谷中）寺域——江戸時代の「天王寺（旧長耀山感応寺）」境内（注63参照）——に笠森稲荷社があった）下記『下谷區史』参照）。

明和7年（1770年）2月、お仙が忽然と姿を消した（19歳前後）。様々憶測を呼んだらしいが、実は、笠森稲荷の地主倉地甚左衛門（旗本御庭番）に嫁いでいたのである。一茶は、文化8年（1811年）10月、「むらおち葉かさ森おせんいつちりし」と詠み、「こつせんと姿を消したことを落ち葉に喩えた。文化期にはすでに伝説の人なのだろう。下五『いつちりし』は、一茶のみならず男たちの共通の感嘆だった。」⁶⁰一茶は松井家（日本橋久松町）と本行寺（日暮里）を何度も行き来しているが、その途中に笠森稲荷がある。浮世絵で見たお仙に思いを馳せていたのだろう。土団子とは、「笠森稲荷の茶店で売った団子。願をかける時は土の団子、願が叶うと米の団子を供えた」⁶¹という（後述する）。

＜『下谷區史』によれば、「功德林寺 京都知恩院末……明治十八年一月、伯爵島津忠寛を發起人とし、新寺建立制規に準じて、谷中共葬墓地有無兩縁諸靈總供養及び古今の戦死者の靈魂を慰めんことを出願し、同年三月十八日許可を蒙り、……同二十六年四月二十九日、入佛會を執行した。……當寺々域天王寺舊境内にて有名な笠森稲荷社、お仙茶屋の故地に當る。しかし現在當寺内に在る笠森稲荷祠は明治四十一、二年の頃建てられたもので、昔時のそれと深い因縁はない。天王寺中の笠森稲荷祠は同寺塔頭福泉院が別當をしてゐたが、同院衰微して之を東叡山寛永寺中養壽院……に譲り、養壽院にては目下寺内に笠森稲荷社を勧請しつつある」⁶²とある（下線及び太字は後藤）。天台宗東京教区の説明によれば、東叡山寛永寺養壽院は「徳川歴代將軍の菩提寺であつた寛永寺の子院で、寛永年間初期に創建され……当初、寺は旧寛永寺地域（上野の山）の西辺にありましたが、江戸の大火や明治維新後の寛永寺の再建などにより……現在の寛永寺裏側に大正6年に移転改築をした」とされ、「明治以後、江戸百観音の札所として信仰を集めていた当院に笠森稲荷尊が遷されました。門前に美人で評判の茶屋ができたりして参詣で賑わつたと伝えられ、……唄いつがれてきた手鞠うたに『向こう横丁のお稲荷さんへ、一銭あげて、ざっと拝んでお仙の茶屋に……』とあります。この笠森稲荷の本尊は今の天王寺の境内にあった養壽院末寺福泉院に祀られ……明治3年この寺が廢寺になり現在は養壽院に遷つされ」たとある⁶³。つまり、台東区上野桜木一丁目の養壽院“笠森稲荷”

⁵⁹ 丸山・前掲『七番日記（上）』202頁（文化8年10月）の注②参照。

⁶⁰ 玉城・前掲『一茶句集』514頁（解説）。丸山・前掲『七番日記（上）』202頁参照。

⁶¹ 丸山・前掲『七番日記（下）』175頁の注⑧。

⁶² 前掲『下谷區史』1039頁。

⁶³ 天台宗東京教区公式サイトで「寛永寺養壽院」を検索。国立国会図書館デジタルコレクション『江戸名所図會7巻』（松濤軒齋藤長秋著〔他〕・出版者：須原屋茂兵衛〔ほか〕・出版：天保5年-7年〔1834年-1836年〕）コマ番号45の図會に長久山本行寺と並んで「長耀山感応寺」が描かれ、「天保4年（1833）、中山法華經寺の日啓らが当山を再び日蓮宗とする運動を展開。……この企ては叶いませんでしたが、当山はこれを機に長耀山感応寺から現在の護国山天王寺へと改称し」たとある（上記サイトで天王寺を検索。下線及び太字は後藤）。一茶（文政10年・1827年没）の頃は感応寺だったのであろう。

(明治3年に天王寺中門前町から移転)がお仙茶屋当時の稲荷である。明治26年、福泉院跡に功德林寺が建てられその境内に「笠森稲荷堂」が祀られた。江戸の古地図を見ると(注18参照)、台東区谷中天王寺境内西南に天王寺門前町、その南の突き当りに新茶屋町があるが(その南に現存する総持院がある)、そこにお仙茶屋があったのだろうか。鈴木晴信のお仙の浮世絵には「かきや(かぎや)の看板や店先の石畳(参道)が描かれている。>

(2) 上の8つの句から面白いことが分かる。笠森稲荷前の茶屋で、①「かさ守りのおせん出て見よ玉霰」とお仙を偲び《起》、／笠森稲荷境内で、②「手の皺〔の〕おち葉かくには相応ぞ」⇨③「やよ烏赤いおち〔葉〕を踏むまいぞ」⇨④「焚くほどは風がくれたるおち葉哉」⇨⑤「風のおち葉ちよいちよ猫〔が〕押さへけり」と落葉の句が続き《承》、／そして、⑥「うつ(宇津)の山風呑んで向ひけり」⇨⑦「土団(団)子けうも木がらしこがらしぞ」と木枯によって空間が広がり《転》、／最後に、⑧「猫の子がちよいと押へるおち葉哉」と大好きな“子猫”と主題の“落葉”で結ぶ《結》。笠森稲荷での8つの光景が次々とリズムカルに描写され、それが物語風に構成されて実に興味深い(下記(4)参照)。

(3) さらに、次のことが分かってくる。(ア)「かさ守りの……」「土団子……」の句から一茶が笠森稲荷にいるのは明らかであり、そこで詠んだ木枯しの2句が時空を越えて広がる。「土団子……」は、「うつ(宇津)の山……」と関連し、「うつ(宇津)の山……」は、後述の「白露や茶腹で越るうつの山」を連想させる。(i) 一茶は、前年文化11年7月4日から8日にかけて「アサノ」(長野市豊野町浅野、門人の西原文虎が住む⁶⁴)や「経善寺」(住職は「長沼六地藏町真言宗経善寺」の呂芳⁶⁵)等を回り、9日に毛野(飯綱町赤塩・滝沢可候がいる)に行き、「申下刻ヨリ大夕立」(午後5時)、10日は「申上刻大夕立」(午後3時頃)の故か毛野に留まっている。毛野から柏原へ入る途中に難所小玉坂がある(注54参照)。11日柏原着だから当日に小玉坂を越えその時に詠んだのが「白露や茶腹で越るうつの山」である(「白露が下りているよ。茶腹で不風流に越える宇津の山」⁶⁶)。(ii) うつの山は「東海道鞠子と岡部の間にある峠」であり(静岡市駿河区丸子と藤枝市岡部町の境(旧東海道)に宇津ノ谷峠がある)、その峠茶屋名物が「十団子」⁶⁷(とおだんご)。玉城『一茶句集』は、「居六の有名な『十団子も小粒に成ぬ秋の風』の前書きは、『宇津の山を過て』(五老井発句集)」であり「これをふまえて名物の十団子を食べたつぷりお茶を飲んだので、茶腹で越えることとなったと揶揄。白露から玉露を連想、その連想から茶腹をイメージ」⁶⁸したという。(iii) 小玉坂へ向かう心境を宇津ノ谷峠に喩え「白露や茶腹で越るうつの山」と詠み、笠森稲荷の土団子から宇津ノ谷峠を連想し「うつの山風呑んで向ひけり」と詠んだのではないだろうか。

(イ) “笠森稲荷”と“土団子”の間に“おち葉”や“木がらし”があるから、この“おち葉”は笠森稲荷境内の落葉であろう。笠森稲荷から宿泊先の本行寺まで550m前後・7分～8分の近さであ

⁶⁴ 文虎は、「佐左衛門といひ飯山藩の御用をつとめる油屋…父栗之とともに、一茶の教えをうけ一茶の死後『一茶翁終焉記』を書いて、その徳をしのんだ」という(小林・前掲『一茶-その生涯と文学』122頁)。

⁶⁵ 小林・丸山・前掲『一茶全集(第7巻 雑録)』(『急進紀』)290頁の注122のほか、丸山・前掲『七番日記(上)』73頁の注⑤等を参照。

⁶⁶ 玉城・前掲『一茶句集』364頁(364の訳)を参照。一茶の「私淑した二六庵竹阿の遺句筆録」である「花見の記付録」に「宇津山 十団子薦のわか葉につゝむべし」とある(小林・丸山・前掲『一茶全集(第7巻 雑録)』356頁及び358頁の注27(「十個ずつ数珠形に麻糸でつないであった」)参照。

⁶⁷ 丸山・前掲『七番日記(下)』65頁の注①。宇津谷の慶龍寺は十団子ゆかりの寺で知られる。

⁶⁸ 玉城・前掲『一茶句集』364頁(657)の解参照。

る。とすると、笠森稲荷に立ち寄った後に本行寺へ入った可能性が高い（松井家⇨笠森稲荷⇨本行寺）。「かさ守りの……」と詠んだのは、笠森稲荷境内（正確には、旧天王寺（感応寺）境内というべきか⇨注63参照）と考えるのが自然である。

（ウ）『七番日記』で「玉霰」が出てくるのは、「かさ守りの……」の他に文化7年12月「玉霰夜タカは月に帰るめり」「玉霰瓦の鬼も泣やうに」（この句の後ろに「廿三日西林寺に入」と記されており、この句が22日の作句ならその日は「廿二 晴」となっている）⁶⁹、同10年10月「玉霰それぞれ兄が耳房（たば）に」「玉霰峰の小雀（こがら）も連れて来ぬ」⁷⁰、同11年11月「玉霰茶の子の足しに飛入ぬ」⁷¹等があるが、最後の「茶の子」に注目したい。「北信濃地方では、お茶を飲みながら長談義して長い冬を越す。茶菓子や漬物などがお茶請けとして用意されたものの、長談義には足りない。そこへ俄かに玉霰が降ってきて、縁側に跳ね返りって菓子盆に飛び込んだ。開放的な家作りの山村で、お茶をのみ話に花を咲かせる地方ならではの初冬の風景」⁷²である。「茶の子」の次が「かさ守りの……」の玉霰である。お仙茶屋で一服中、玉のような霰が降って来て参道の石畳や茶屋の床机に跳ね返っている、「茶の子」の「玉霰」を連想して一句……こんな状況だったのではなからうか。

＜『七番日記』には、「霰」「あられ」も度々出て来るが⁷³、日記に霰の表記はない。なお、文化7年11月の句に「十月の中の十日の霰哉」があるが、この作句が10月か11月か定かでない。10月10日なら「晴 布川二入 金毘羅講 興行」となる。11月10日の場合も「晴」となるが、この日は窃盗容疑が晴れた翌日でもある——文化7年11月3日に成美宅（随斎庵）にて480両紛失事件が発生、一茶が疑われ8日まで「不許他出」（禁足）、9日に「イセヤ久四郎 奴480両盗ミ去」⁷⁴と判明。＞

（4）以上を踏まえ、笠森稲荷での一茶の行動を推理してみよう。お仙茶屋で一服中に（いつも通る一茶は馴染の顔だったかも知れない）霰が降ってきた場面から始まる。

「あらら、玉のような霰だ、石畳や床机にポンポン跳ね返って“茶の子”にもならないが面白いね……お仙も出てきて見なよ。この先は笠森稲荷、吹き溜まりに落葉がこんもり……老人が掻き集めて焚火をしている、手の皺が（親父の手のように？）深くて熊手みたいだ、“おち葉かくには相応ぞ”だな……“やあ鳥、赤い落ち葉を踏まないようにしなよ”⁷⁵。木枯しか……“焚くほどは風がくれたるおち葉哉”、猫が“風の落葉”にじゃれている、素早いねえ。笠森稲荷に土団子が供えてあるぞ、誰か願かけしたんだね……“一銭あげて、ざっと拝んでお仙の茶屋に（上述）”……か。団子といえば宇津ノ峠の十団子を思い出す、お腹がすいてきた……“木枯らし飲んで向かいけり”だな。お仙が姿を消してから人出もまばら、願かけの土団子も木枯しに吹かれている、“土団子けふも木

⁶⁹ 文化7年12月の2句につき、丸山・前掲『七番日記（上）』132頁。

⁷⁰ 文化10年10月の2句につき、丸山・前掲『七番日記（上）』409頁。

⁷¹ 丸山・前掲『七番日記（下）』102頁。

⁷² 玉城・前掲『一茶句集』471頁（855）。

⁷³ それぞれ、丸山・前掲『七番日記（下）』487頁「初句索引」、及び玉城・前掲『一茶句集』590頁「全句索引」にて確認・参照。

⁷⁴ 丸山・前掲『七番日記（上）』125頁～126頁。井上ひさし『完本小林一茶』（2020年・中公文庫）がこの事件を面白く書いている（「一茶との一夜」同書13頁～17頁参照）。

⁷⁵ 玉城・前掲『一茶句集』515頁（938）の圖参照（「黒い鳥が赤い落ち葉を踏むのを、縁起が悪いとするのだろう。生き物を人間と同類と見て、『……すまいぞ』という狂言の口調を用いて、戯れに論ずところがユーモラス」という）。

がらし木がらしぞ”……そんな心境だ、でも願いが叶えばいいねえ。日も暮れてきたし、そろそろ本行寺へ入るとするか……。おっと、子猫が“ちょいと”落葉を押さえたよ⁷⁶、得意げな顔……可愛いねえ、もう言葉にならないよ……。」

3. 第3の謎:いつ詠んだのか(日時) 一茶は、10月何日の何時頃詠んだのか。「玉霰」「おち葉」「焚火(落葉焚き)」「木枯らし」がヒントになる。

(1) 先ず、当日の天気と行動を推理しよう。(i) 霰が降ったから大晴(快晴)ではなく雲か晴、霰は大体気温が下がると一時的に降るので、夕方・日暮(日没)の少し前か。(ii) 焚火をしているから雨(及び前日が雨)の日は外れる。(iii) 木枯らしが吹いているが、焚火を考えると落葉をサラサラ運ぶ程度の弱い北風か(「猫の子がちょいと押へるおち葉哉」)。(iv) 以上から、その日は、おそらく他所から移動し日暮前に笠森稲荷へ差し掛かり、天気は曇(または晴れていたが一瞬霰が降り)、時たま弱い木枯しが吹き、その夜は本行寺に泊まったのであろう。

(2) 次に、本行寺泊の8日分を抜き出し(⇨長)、その日の天気を確かめよう。

◇2日⇨晴・長1 久松町松井家から日暮里の本行寺へ移動(昼前に到着)。

◇3日⇨曇(陰)・長2 千駄木大田公館(現在の「千駄木ふれあいの杜」)に行っている。本行寺から約1.4km、18分前後。翌4日に松井家へ。

◇6日⇨晴・長3 松井家を発ち元岩井荒木安兵エ方で表紙130枚購入して本行寺へ。

◇7日⇨(午前3～4時より雨、17～19時「雨甚だしく」、21～23時より晴)・長4 一封を允兆宛に出している(赤汐宗介)。

◇8日⇨大晴・長5 雲一つない快晴だろうから、霰は考えにくい。

◆13日⇨曇(陰)・長6 松井家から本行寺へ移動、他に用事もなかったのだろう。

◇14日⇨「陰 小雨」・長7 曇のち小雨または曇時々小雨、落葉焚きには向かない。

◇16日⇨晴・長8 長久山本行寺8泊目。

(3) 雨・大晴を除き焚火ができそうな晴・曇は、2日・3日・6日・13日・16日(前日雨でないことも一要素となる⇨後述)。このうち、2日は昼前に久松町から本行寺へ移動したので午後に笠森稲荷へ出かけた可能性があり、3日も三阿や千駄木太田公館の田口勘介を訪ねた後に笠森稲荷へ向かった可能性があり、さらに、6日も元岩井で紙を購入し本行寺へ行く途中に笠森稲荷へ立ち寄った可能性があるが、これらには難点がある(⇨下記(ア))。

先に、『七番日記』の上段に年月日・晴雨・行動・見聞等が記載され、下段にその月の作句が記録(文化8年以降は二段分載形式)⁷⁷されている旨述べたが、その視点から日付と作句の関連(日付の下段にどの句があるか・句の上段の日付はいつか)を調べてみた。

(ア) 10月は全82句、その37～44番目(全体のはほぼ中央)が笠森稲荷の8つの句である。日付と句の位置関係を見ると、この8句は10月2日・3日の日付から大分離れている。6日との間隔は縮まるが近くはない。16日の場合は、時刻の問題がある。松井家⇨流山⇨本行寺と43km余、10時間近

⁷⁶ 井上ひさし「一茶百句——井上ひさし選」は、「猫の子がちょいと押へるおち葉哉」をその一つにあげる(井上・前掲『完本小林一茶』所収・35頁参照)。一茶は、『七番日記』でこの句とその前の「土団(団)子けうも木がらしがらしぞ」の句の頭に○印を付けている。

⁷⁷ 丸山・前掲『七番日記(下)』(解題)471頁。

く歩けばもう夜だろうから、更にその先の笠森稲荷へ行くには遅過ぎる。

(イ) それに比べ、13日は有望である。日付と句の位置関係も近く、10月13日の下段付近に8つの句が並んでおり、その最後尾「猫の子がちょっと押へるおち葉哉」(全82句中44番目)のほぼ真上が13日となっている(なお、『七番日記』の「記載順序には前後不整な部分があり、異年次作句を諸所に挿入している……これは紙幅の都合で、余白のある所を利用して、異年次の作句の一部を挿入追記したものと思われるが、これらの挿入部は十数箇所にと及⁷⁸ぶというが、8つの句は「前後不整な部分」に当たらず、むしろ上段の13日と強い相関関係が認められる)。久松町松井家から不忍池・上野寛永寺を通過し笠森稲荷まで約5km・1時間4分前後、そこから本行寺まで約0.5km・6分前後。午後1時半～2時頃久松町を発てば3時前後に笠森稲荷へ差し掛かるが—その日の日暮里の日没が“4時36分”⁷⁹頃—気温も急に下がる時刻である。曇で(8日から12日までは日本橋は晴が続いているから、約4.5km北の日暮里・谷中付近も(雨は降らず)晴が続き13日は薄曇というところか)、お仙茶屋で一服中に霰が降ったが、時折り吹く弱い木枯らしでさえ吹き溜まりができる位に落葉は乾燥していて焚火にはまあま。敢えて時刻をいうなら、日暮前の3時半～4時過頃がぴったりくる。

(4) いつ・どこで：一つの推論　かくして、一茶が「焚くほどは風がくれたるおち葉哉」と詠んだのは、文化12年10月13日、日暮前(3時半～4時過ぎ頃)、松井家から本行寺へ移動途中の笠森稲荷境内(旧天王寺(感応寺)境内)で、との推論が成り立つ。

4. 一茶:こね返し、言葉が擦り切れるまで　遺産争い解決2年後に詠んだ「焚くほどは……」の句に、“こうして生活できるのは父が遺してくれた田畑(の収益)のお陰”との思いが込められているのではと以前考えたこともあるが⁸⁰、落葉の一瞬の光景をリズムカルに詠む一茶の姿からは、もはやそういう感傷的な情景は浮かんで来ない。一茶は、「たゆみなく作った。彼の意識をよぎり、感覚に触れるあらゆるものを、手当たりしだいに句にし……旧作の焼直し、故人・今人の句の翻案、駄作であれ類句であれ、かまわず執拗にこね返し、言葉が擦り切れるまで詠み続け、まさに俳諧一筋に生き抜いた65年の生涯であった」⁸¹という。「焚くほどは……」の二つ前に「手の皺〔の〕おち葉かくには相応ぞ」があるが、3年後の文化15年10月に「窓下へ足で寄(よせ)たる木〔の〕葉哉」「入(要)程は手がかいて来る木の葉かな」⁸²とやはりこね返している。

三 良寛の「焚くほどは……」との関係

1. 良寛「焚くほどは……」の経緯・背景　文政2年(1819年:良寛62歳)、名君の誉れ高い長岡藩9代藩主牧野忠精(ただきよ:宝暦10年(1760年)–天保2年(1831年))が城下の寺に迎えたいと五合庵を訪ねて来た時、良寛は「焚くほどは風がもて来る落ち葉かな」と書いて差し出し、これ

⁷⁸ 丸山・前掲『七番日記(下)』(解題)472頁。

⁷⁹ インターネットで「日の出日の入り時間検索」で検索し2020年11月13日の荒川区西日暮里を調べると日の出「06:15:02AM」、日の入り「04:35:23PM」と出てくる。「東京都荒川区西日暮里5丁目31-7 西日暮里駅日の出日の入り時間」で検索し1900年(これが最も古い表示)11月13日を調べると日出「06:14:21 AM」、日没「04:36:10 PM」と出てくる。1815年11月13日(文化12年10月13日)の日暮里の日の入(日没)も4時36分頃だろうか。

⁸⁰ 後藤・宗村・前掲「諏訪の末子相続と北信濃の均分相続」162頁～165頁参照。

⁸¹ 丸山・前掲『新訂一茶俳句集』(解説)386頁。

⁸² 丸山・前掲『七番日記(下)』444頁参照。

を見て忠精は労りの言葉をかけ国上山を下ったという逸話がある⁸³。一茶が詠んだ4年後のことである。牧野忠精は、寛政の改革主導者・松平定信（白河藩主）失脚後、“寛政の遺老”の一人として幕政を担った（就任：享和元年（1801年）～文化13年（1816年）／（文政2年に良寛を訪ねる）／再任：文政11年（1828年）～天保2年（1831年）辞任・隠居）。

＜寛政の遺老：松平信明（老中首座）・戸田氏教・本多忠籌・牧野忠精・太田資愛（☞『七番日記』文化12年10月3日・8日に「太田公」の名が見える）・安藤信成。定信の引締政策は、「白河の清きに魚のすみかねて もとの濁りの田沼恋しき」と揶揄された。＞

（1）相馬御風『一茶と良寛と芭蕉』（大正14年）に興味深い説明がある（「焚くほどは……」は、「もともと一茶の句であって、しかもあの当時ひろく人口に膾炙してみたのを良寛が心にとめてみて、方々でそれを話の種にでもしたのであらうか、それとももとはそれが良寛の口すさんだものであったらうか——そのことを私は先づ考へて見なければならぬのであるが、しかしそれは一茶自身の日記に此の句の書かれている……以上、そして良寛の方にそれと匹敵するほどの文献すらも発見されてゐない以上、もはや何とも考へ直して見る余地のない問題」とし、次のように続ける）。

「深く味つて見ると僅かにその一つの言葉の相違によつて二つの句全体がそれぞれ全く独立して存在し得るほどの結果を示しているときへ考へ得る。『くれたる』にはなほ自己を主にした自然へのはからひがある。彼の眼に映じた自然はなほ相対的である。しかし『もて来る』には自然が拡充している。主我的なはからひがない。自然は自然である。その恩恵にあづかるのはこちらからである。それに感謝するのもこちらの心からである。そんな風に見て来ると、やはり、一茶は一茶、良寛だと（ママ）うなづかれる。」⁸⁴

玉城『一茶句集』は、巴人（草野巴人：延宝4年（1676年）－寛保2年（1742年）、江戸中期の俳人で門下に与謝蕪村がいる）の句「焚くほどは夜の中に溜まる落葉哉」が「一茶や良寛句より先に詠まれているが、これらの影響関係はわからない。つましく自足して生きるのが分相応と理屈をつけるとつまらなくなる」という⁸⁵。

（2）二人に交流はあったか。一茶は、帰郷の度に「門人の獲得に努め……一茶社中は……北信一帯にひろがり、特に長沼、高井、六川、浅野、毛野、中野、湯田中、野尻、関川、善光寺などは、その有力な地盤で……庄屋、名主、大地主、僧侶、医家、酒造家、油問屋、旅館主など、土地の有力者や素封家が多」⁸⁶だったという⁸⁷。また、江戸及びその近郊に頻繁に出掛け門人・知人に会っている（『七番日記』で確認できる）。何処かで“手毬上人”のことが話題に上ったかも知れない（長岡と江戸に半年ずつ滞在し柏原の一茶宅を訪問したことのある太箒（半年庵）との交流もある－注31参照）。良寛は、

⁸³ 例えば、早坂暁・杉本苑子ほか『わがこころの良寛』（1994年・春秋社）の中の早坂暁「乳虎の隊」23頁～24頁、牧野忠精につき、『越後長岡ROOTS400』第9号「〈特集〉牧野忠精のルネサンス」（2018年・長岡開府400年記念事業実行委員会発行）参照。

⁸⁴ 相馬御風『一茶と良寛と芭蕉』（1925年・春秋社）10頁以下。

⁸⁵ 玉城・前掲『一茶句集』516頁。

⁸⁶ 丸山・前掲『七番日記（下）』483頁（939）。

⁸⁷ 「信越自然郷」HPに小林一茶7代目子孫小林重弥氏の話が載っている。「……『一茶はとても頑固な人だったんではと思います……柏原へ帰ってから変人扱いされていた。弟子はほとんど飯山や長野近辺。食べるためにそっちの方を回っていたんですね』……と小林さん」（信越自然郷HPで「小林一茶、七代目子孫 小林重弥 信濃町」を検索。下線は後藤）。

寛政4年(1792年35歳説⁸⁸)に越後に戻り⁸⁹、一茶は、文化9年(1812年50歳)に江戸を引払い柏原へ帰ったが、「良寛と一茶の直接交渉はない」⁹⁰ようである。

2. 良寛：雨降らば降り風吹かば吹け (1) 良寛は、後年「捨てし身をいかにと問はばひさかたの雨降らば降り風吹かば吹け」と詠んだ(「俗世間を捨てて出家した身は、どのようなか尋ねられたならば、雨が降るならば降るのにまかせ、風が吹くならば吹くのにまかせて過ごしていると、答えよう。」⁹¹) 室町期の一休宗純(応永元年(1394年) - 文明13年(1481年))は、「有漏路(うろじ)より無漏路(むろじ)へ帰る一休み雨ふらば降り風ふかば吹け」と詠んだが、良寛も同じ悟境に至ったのだろう(有漏路は煩惱が多い者のいる世界・この世のこと、無漏路は煩惱のない清浄な世界を道にたとえたもの、とされる(広辞苑))。

(2) 江戸後期の紀行家菅江真澄は、天明4年(1784年)7月1日、松本“白糸の湯”(筑摩(東間)の御湯)で玉島田通寺国仙和尚(良寛の師)と出会い話をした様子を『来目路の橋』に記している。その一部にこうある。

「……ぜじのふせやも近う、ずんさ(従者)の僧達あまたの声にて、みず経聞えて、やをら、はつるころとぶらひて、なにくれの物語をす。此のぜじの云、近きとし、君につかうまつりし士の、いかゞしたりけん、うつ・なう心みだれてとしころありつる人に、われつたなう、『捨てし身は心もひろしおほ空の雨と風とにまかせはててき』と、ながめて見せしかば、これ三たびず(誦)し返し返して、やがて気も心も涼しうなりて、ふた・び君につかへしことありなど聞えしに、この歌の末の、きもじを、はといひかへえて、すてし身は心もひろし大空の雨と風とにまかせはててはとして、その人の返しやし侍らんといへば、ぜじ、おとがひをはなちてわらひたまへば、近くまどゐしたる僧もほ・ゑみたり。」⁹² (下線は後藤。真澄は、後年、手毬上人(良寛)に言及している。注92の下線部参照)。

水上勉『良寛』は、「『まどゐしたる僧もほ・ゑみたり』の僧は良寛だったかと思いたくなる」⁹³と語る(「母の死は前年4月29日……真澄の逢ったのは7月1日だから、出雲崎では一周忌の法事がすんでまもないころだろう。どうせ越後へゆくなら国仙が随行層をえらぶのに母の訃報をうけてかなしみ、心しずんでいたろう三十ばん目の弟子をつれてゆかぬはずはあるまい」⁹⁴とも)。円居しほほ笑む僧の中に27歳の良寛がいたのではと私は想い描くが、いずれにせよ、国仙和尚と真澄のやり取りを胸に刻んだ良寛は、旧懐の情

⁸⁸ 円通寺及び国山上寺は38歳説、全国良寛会及び燕市分水良寛資料館は39歳説(各々のHPを検索)。

⁸⁹ 水上・前掲『良寛』は、寛政7年(1795年)に良寛の父以南(京都桂川での入水前)が一茶と会い俳句を交わしたとする(同書128頁以下。東郷豊治『良寛全集』〔上・下〕(初版1954年(昭和29年)・東京創元社)128頁～129頁を引用する)。

⁹⁰ 矢羽勝幸『一茶大事典』(1993年・大修館書店)140頁に文政3年9月27日「越後出雲崎の左右が来訪。〔随斎筆記〕「良寛と一茶の直接交渉はないが一茶の名声は出雲崎にも達しており、両者ともその名前ぐらいは知っていたであろう」とある(信濃教育会編『随斎筆記』俳諧寺一茶遺稿(昭和2年・古今書院))。

⁹¹ 内山知也・谷川敏朗・松本一壽編集『定本 良寛全集 第二巻 歌集』(2006年・中央公論社)193頁。一休については、安藤英男『一休 逸話でつづる生涯』(1985年・鈴木出版)を参照。

⁹² 菅江真澄『来目路の橋』内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集第一巻』(1990年・未来社)156頁～157頁。真澄は、後に「高志のものがたり」で「文政5(1822)年といふとしの夏5月8日、久保田なる長野坊小野寺の館に在りつるに、雨いよふる日、越後ノ国蒲原郡出雲崎の橋窠守〔須母理也〕由之訪来、……此由之翁が国上山の手毬上人良寛の舎弟なるよし……」(内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集第十巻』(1984年・未来社)所収(「筆のまにまに」)168頁)と記す(下線は後藤)。

⁹³ 水上勉『良寛』(1997年・中央公論社)102頁。

⁹⁴ 水上・前掲『良寛』101頁～102頁(良寛の母が「没して1年目、国仙は良寛をつれて旅の途上、菅江真澄とめぐりあったことが証される。良寛が同行した確証はないが」という一書101頁)。

をもって「捨てし身をいかにと問はばひさかたの雨降らば降り風吹かば吹け」と詠んだのではないか。(3) お釈迦様は、「田あれば田を憂い宅あれば宅を憂う」と説き〔無量寿経〕、良寛は、寺も持たず無一物、師国仙和尚から授かった杖一本、「雨降らば降り風吹かば吹け」と言い天真に任せて生きた（「生涯身を立つるに懶く 騰々天真に任す 囊中三升の米 炉辺一束の薪 誰か問わん迷悟の跡 何ぞ知らん名利の塵 夜雨草庵の裡 雙脚等間に伸ばす」⁹⁵）。「形見とてなにか残さむ春は花山ほととぎす秋はもみじ葉」⁹⁶は、“清貧”の極みを教えてくれる。

「焚くほどは……」の句も大方は“煮炊きする位は風が持て来る落葉で十分”と解する。しかし、この句をじっと見ていると少し違う光景が現れる。五合庵は国上山の林の中にポツンとあり、周りが落葉で埋まるとじきに雪が降る。雪の前なら随時（風を待つ間でもなく）落葉を拾って来て煮炊きできる。肝心なのは煮炊きする食料の方であるが、こればかりは托鉢（布施）や差入れに頼るほかない。農耕もせず煮炊きができるのは“人々”の温かい心（善行）のお陰、風が持てくる落葉のように人頼みの生活ができる、そんな思いを伝えたかったのではないか。とすれば、それはなぜだろうか。

(4) 越後平野を縦断する信濃川が燕市大河津で分水し（大河津分水路：大正11年通水）、国上山南麓から日本海（寺泊）に滔々と流れ込む。以前は川が氾濫する度に一帯は泥海となった。治水（分水）工事は一向に進まず、生き延びるため娘を身売りする農民もいた（飯盛女）。手毬をして遊んだ娘が一人また一人といなくなる事態に“良寛さん”は涙したに違いない⁹⁷。大洪水で被害を受けた“人々”の歎きを「寛政甲子の夏」に記している（「……一朝払地耗 如之何無罹」（一朝にしてすべてを失った、どうして悲しまずにおられようか）。なお、寛政に甲子の年回りがないので文化元年甲子（1804年・良寛47歳の頃）の誤りではとの指摘がある）⁹⁸。

忠精が良寛を訪ねたのは、この15年後（文政2年・1819年）である。ちょうどその頃、財政破綻寸前の隣国米沢藩では、上杉鷹山（治憲：寛延4年（1751年）－文政5年（1822年））主導の下、武士も民も藩を挙げ用水事業（黒井堰・穴堰）・新田開発（籍田の礼）・殖産興業（米沢織）に取り組み財政再建を果たしている。鷹山は国（藩）の“人民”を大事に考えた（『伝国の辞』註99参照）。時期は不明だが、良寛は米沢を訪れ「米沢道中」を書いている（「幾行の鴻鴈鳴いて南に去り 首を回らせば秋の蒼茫たるに堪えず 千峰の葉落風雨の後 一郡の寒村夕陽を帯ぶ」）。この道中を文政4年（1821年）～6年頃として（鷹山死去前後の頃）、学問的に同系譜（同門）の上杉鷹山（良寛の師大森子陽も鷹山も儒者細井平洲に師事した）が立派に成果を上げていることを聞き「自分をとりまく越後の農民の現実の困窮を見て、何が何でもこの眼で隣国の民の様子や…善政」を見たくなったのではとの示唆に富む見解がある⁹⁹。

⁹⁵ 燕市国上乙子神社境内にこの歌碑がある。長谷川洋三「良寛詩異説」は、「騰々任天真」を「不生無相という自己の内なる仏に任せてゆったりとしている」（天真は天真仏のこと）と訳す（『早稲田人文自然科学研究』第40号（1991年）198頁）。

⁹⁶ 水上勉『良寛を歩く』（1986年・日本放送協会）232頁（辞世の歌ではなく、約30年住んだ国上（五合庵・乙子神社）を離れる（和島村島崎木村家へ移る）時に知人へ書いた歌とされる（同書209頁参照））。

⁹⁷ 水上・前掲『良寛を歩く』14頁～46頁及び192頁～204頁参照。

⁹⁸ 水上・前掲『良寛を歩く』52頁～65頁。「もし、甲子の年なら、和尚は47歳……大洪水の年回りということになる」（同書62頁）。寛政は元年：己酉（1789年）～12年：庚申（1800年）となる。また、水上・前掲『良寛』211頁～214頁、吉本隆明『良寛』（2004年・春秋社）72頁～73頁参照。

⁹⁹ 川内芳夫『良寛－米沢道中の目的は何であったか－』（平成2年・考古堂）352頁を参照（良寛の詩「米沢道中」〔宿玉川駅〕の究明過程が面白い）。鷹山は、17歳で米沢藩9代藩主、藩財政を立て直し江戸時代屈指の名君と評される。鷹山35歳の時、養嗣子・治広に家督を譲る際、藩主の心構えを書いた「伝国の辞」（天明5年・1785年）

文政11年(1828年・良寛71歳)11月12日、M6.9の大地震が三条を襲った(越後三条地震)¹⁰⁰。良寛は涙を流し被災地を訪ね歩いたという。翌春、犠牲となった“人々”の大法要が与板(三島郡)の徳昌寺で営まれ、これが与板藩(2万石の小藩ながら文化元年(1804年)に城主格)8代藩主井伊直経(なおつね)の寄進によることを聞いた良寛は、直経を「愷悌(がいてい)の君」(心和らぐ君主)と讃えた(「……吾是の語を聞き仍りに歎息す 誠なる哉当時愷悌の君 供養を淨弁して僧衆を請ず 今日好日好因縁 看よ看よ無礙の法力は苦界を渡し 多少の亡靈諸天に生ぜん」と詠み、「いささか残す 水茎の跡」と特筆する)¹⁰¹。“人々(人民)”を思う直経の行いに歎息するほど感心したのである。

忠精が五合庵を訪ねた時、62歳の良寛は、権力者や仏教界を見据え(忠精を介し)問うたのではないのか。“深い憂い”をもって、名利の路に迷い込んでいないか¹⁰²、仏法の根本とは?日々の糧は、風が持ってくる落葉のように、“人々”から頂いているのです……と。

◀長野善光寺境内の良寛詩碑「再游善光寺」解説版に「この漢詩は良寛さまが42歳のころ帰郷の途時2回目の善光寺参詣の折におつくりになられた…。再び善光寺に遊ぶ 曾って先師に従って此の地に遊ぶ 首を回らせば悠々二十年 門前の流水屋後の嶺 風光猶似たり昔日の妍」とある¹⁰³。江戸中期以降、越後小千谷と信濃飯山を結ぶ善光寺街道(十日町街道)が善光寺詣の旅人で賑わったという。良寛も歩いたのであろう。飯山には正受(しょうじゅ)老人(道鏡恵端)の過ごした正受庵がある。そこで修行し後に臨済宗中興の祖と称されたのが達磨の絵で有名な白隠禅師である(白隠慧鶴:貞享2年(1685年) - 明和5年(1768年))。24歳の時に正受老人を訪ね鼻柱を挫かれ崖下へ蹴落とされた(蹴落とし坂が今も残る)。白隠禅師を敬慕する良寛は、白隠の「君看双眼皮 不語似無憂」(君看よ双眼の色 語らざるは憂い無きに似たり)を書き遺した(白隠の郷里駿河(沼津市)松蔭寺境内の良寛遺墨碑「白隠語句」に刻まれる¹⁰⁴)。蹴落とし坂の前で杖を突き呟く良寛が脳裏に浮かぶ。“目を見て下さい、その奥にある憂いを、語れないほど深い憂いを”。>

を授けている(「一、国家は先祖より子孫へ伝え候国家にして我私すべき物にはこれ無く候 一、人民は国家に属したる人民にして我私すべき物にはこれ無く候 一、国家人民の為に立たる君にして君の為に立たる国家人民にはこれ無く候)。隠居後も広治を後見し実質上藩政を導き72歳で死去。参考まで、童門冬二『内村鑑三の「代表的日本人」』(2007年・PHP)82頁～111頁、藤沢周平『漆の実のみのる国(上・下)』(文春文庫)をあげておく。¹⁰⁰地震学者宇佐美龍夫氏(東京大学名誉教授)によれば、長岡から三条・燕に到る信濃川流域が震度6以上の烈震を受け、与板で見つかった町の絵図に「一軒一軒の戸主の名前が記され、記号で焼失(17かまど)・潰家(263かまど)・半潰(96かまど)の印がついて…死34人、傷110人、家大破408かまど、土蔵潰10、同破損91…総被害は、死1681人、傷2572人、潰家13149、半潰家3539、焼失家1083、田畑損1250町以上、堤損壊3.8万間」とあり、凄まじい液状化現象の農村(田園)直下型地震だったという(「農村(田園)直下型地震 - 越後三条地震の液状化現象」『予防時報』193号2頁(1998年・日本損害保険協会))。

¹⁰¹長岡市与板徳昌寺の「良寛詩碑(香積山中有仏事)」より。徳昌寺は良寛の父の生家の菩提寺。当寺に直江兼統(元与板城主・初代米沢藩主上杉景勝の時の家老)の位牌がある(故あって米沢から持ち帰った)。墓所は米沢の林泉寺にあり、鷹山は兼統200回忌法要を営んでいる。

¹⁰²水上・前掲『良寛を歩く』114頁～122頁(良寛の『僧伽』に「名利の路を踏むことなかれ」とあり、同書119頁に「この詩篇を……よんでみながら思うのだ。何と、良寛和尚はきびしい眼で、仏教界を見すえておられたか…」とある - 下線は後藤)。水上・前掲『良寛』9頁以下、吉本・前掲『良寛』66頁以下も参照。

¹⁰³案内板「良寛詩碑」(長野良寛会)の説明では、良寛の善光寺初参詣が22歳の安永8年(1779年)頃となり、国仙和尚に随行し玉島円通寺へ向かった頃である。27歳の時(天明4年(1784年)に菅真澄が松本白糸の湯で国仙和尚一行に会った時)に善光寺を訪れたとすれば42歳以前に2回となる。27歳が初参詣なら再游は47歳頃か。

¹⁰⁴松蔭寺境内にある良寛遺墨碑「白隠語句」の説明版に「白隠禅師の著『槐安国語』巻五にある語。大燈頌古「千峯雨露光冷」(千峯雨はれて露光冷じ)の句に付けた白隠の下語の一部。良寛は白隠に共感してこの語を書いた(但し愁を憂と書いて)……沼津良寛会」とある。また、水上勉『水上勉5自選仏教文学全集 流離の仏教者たち』(2002年・河出書房新社)、芳澤勝弘『白隠 - 禅画の世界』(2005年・中公新書)等も参照。

おわりに——一茶は一茶、良寛は良寛

最後になるが、平成21年（2009年）のある新聞記事¹⁰⁵を紹介しよう（『』内）。

【江戸時代の僧・良寛…の代表的な俳句とされながら、作品の自筆が残っていないため、「他人の作では」とも言われた句について、「良寛作」とする新史料を、良寛研究家の富沢信明・新潟大名誉教授（67）が発見した。……この句は「焚くほどは 風がもて来る 落葉かな」……。しかし、同時代の俳人・小林一茶…が1815年に記した日記には、「焚くほどは 風がくれたる 落葉かな」との俳句があり、「良寛がこの句をまねたのではないか」という指摘も。富澤さんは今年9月、良寛関連の書物を収集している知人の所有物の中に、問題の句を良寛作と明記している句集「発句類題越後獅子」第2巻を見つけた。句集は越後の俳人の編集で、奥付の記載から、良寛没後約1年の1832年に出版されたとみられる。良寛の句は、問題の句を含め2作品を所収。一茶の日記は個人的なもので当時は公開されておらず、一茶と良寛が会った記録もないことから、富澤さんは「信頼性の高い史料。良寛が一茶の句をまねたとは考えられない」と説明する。「全国良寛会」副会長、加藤僖一・新潟大名誉教授（73）も「当時は出版に数年かかったことを考えると、編集時点では良寛が生きていた可能性が高い。編集者は良寛直筆の句を見たと考えられる」と評価する。】

その後、何か進展があったのかどうか分からないが、良寛がまねたとは考えられないとしても“類似性”の疑問は残る。ただ、それも意味のある疑問とは思えなくなった。一茶は、笠森稲荷で目に飛び込んだ一瞬の光景を鮮やかに「焚くほどは風がくれたるおちば哉」と詠み、良寛は、杖一本の乞食（こつじき）の人生をありのまま「焚くほどは風がもて来る落ち葉かな」と詠んだ。自己を主にした自然への計らいがある「くれたる」と自然が拡充し主我的な計らいがない「もて来る」（相馬・上述）とは別次元のもの、一茶は一茶、良寛は良寛である。

令和3年5月25日 摺筆

¹⁰⁵ 平成21年11月19日付読売新聞。富澤氏はネットワーク理論・離散システム理論が専門とのこと（富澤信明編著『良寛の弟山本由之遺墨集 没後百七十年記念』（2003年・考古堂書店）著者紹介より）。